

問い2 法事や葬儀は何のためにするのですか。しなければいけないのですか。

連研中央講師・北海道教区
脇谷 暁融

『連研ノートE』が2020年3月に改訂され、より身近なものとして具体的にこのテーマは示されました。法事や葬儀のことをきっかけとして、お一人おひとりがお寺とのあいを取り返してみてください。

現代において、初めてのお寺とのご縁（お参りをしたきっかけ）は、ご親戚の法事やお身内の葬儀だったのではないのでしょうか。また、それまであまり関心をもつことのなかったお仏壇をご実家から引き受けることになったり、帰郷した際にお勤めしていた法事やお墓参りなども、単にひとつの習慣として意識をせずに行ってきたのかもしれない。

こう考えるならば、このテーマは浄土真宗の教えにであった私たちが、これまでも、これからも長く問われ続けていく根本の課題でしょう。今回をきっかけに私自身がどうであったのかを考えてみる絶好のチャンスととらえてはいかがでしょうか。

このテーマをあきらかにするには、一般的な理解として法事や葬儀をどう受け止めているのかを考えてみましょう。それと同時に、主語（誰が）と目的語（何のため、誰のため）をはっきりとさせていく必要があります。

世の中全般では、これを「私が亡き人の供養のために勤めていく」という前提に立っています。その結果、規模を小さくしてでも、どうにかして「しなければならないのか」という問いが生まれてくるのです。法事をしなければ何かトラブルや災いをもたらされるのではないかという不安や恐れが、私たち自身をさらに縛っていくこととなります。あるいは、葬儀で周りに迷惑をかけたくないのでは家族葬をとという声にはじまり、通夜を勤めない一日葬、葬儀自体を勤めず火葬していく直葬と言われるものまで、今までは考えも及ばなかった形態へと変わっていています。

それはまた、従来から営んできた法事や葬儀において、勤めてきた住職や僧侶に対する不信感、お布施への疑問などが大きく関わっていると考えられます。よく解らないお経をあげて亡き人の供養だと言われても、足が痛いのをガマンして難解な用語の話を聞いても、肝心の「何の誰のためのもの」かが分からないままですと、何かに強制され、お寺や習慣に従い勤めている感は拭えません。実際に、一度や二度そのように感じられた場面もあったのではないのでしょうか。そのような経験を、ぜひ話し合い法座の中で声に出してみてください。一緒にご参画いただいている仲間にとって、それは話し難い遠慮される話なのかもしれません。しかし、そのような思いを聞けることで私たち自身（ともに集う連研スタ

ップ) にとっては自らの姿を振り返る大切な時間となります。

これらの点を踏まえたうえで、では「誰が何のために、どういう意味をもっているのか」を考えてみましょう。確かに、家族や知人・友人に死別した方がいるという現実が、すべてのスタート地点にあります。この事実をもって、私たちは法事や葬儀を営んでいきます。

少しイメージしてみましょう。「亡き方のご命日に、お供えを携え、季節の仏花をかざり、ろうそくを灯し焼香する、その中で僧侶が経典を勤めあげていく」もし死別した方がいなかったならば、私たちはこの場面にであっていきことはありません。すべてはここ（儀式・形式）から始まります。この場面を客観的に眺めたならば、「私が亡き人のために」さまざまなことを「してあげる」というように受け取れます。

しかしながら、本当に私たちは「亡き人のためにしてあげられる」ことなどあるのでしょうか。私たちは自分のことでさえ何ひとつままならないまま、毎日、毎時間を手一杯に追われ続け、周りどころか自分自身のことさえ気を回せないでいます。その私が亡き人に対して、何かしてあげる・何かできるなどと言ったなら、それこそおこがましい、身の程知らずではないでしょうか。「人の為」と書いて「偽り」という字が作られています。

私たちはどれだけ財産や地位があったとしても、死という厳然たる事実の前では何の意味ももちません。亡き人に向かって何ひとつすることなどできない、どこまでいってもできない、非力・無力であるという自覚からスタートしていくのです。そう考えるならば「私が亡き人のために」と考えてきたのは、少し違う理解だったと見えてくるはずです。

今回のテーマは、法事や葬儀の映し出される形にこだわっていたあまり、本当の意味（内実・本質）を考えることのなかった私自身の姿が浮き彫りになってきます。そう考えると、私たちはその方が生前どのように生き、何を語ってきたのかを法事や葬儀を通して知らされることになるでしょう。亡くなった後（死後）に「生前」と言われるのは、生きていた外見だけを示しているのではなく、真実の世界・お浄土に「生まれる前」の行動や生き方を示しています。死別後もその方の生きざまから、さまざまなことに気づかされ続けていくひとつのしるべ（標）として、私たちの人生を願い、護り、支え、案じ通し続けているはたらきが存在することにも気づかされます。

「生と死」を別物と考えていた私にとって、その声なき声を今なお聞き続けていく営みとしてあると考えてみてはどうでしょう。私の人生にとって、自らのいのちや生き方がどうなのかと実直に向き合うため「亡き人が私のために」与えてくださった場面と受け取ってみましょう。「私が向けている」のではなく「私に向けられている」と矢印の向きを逆に考えてみることで、誰かに言われたから「しなければならぬ」のではなく、私自身の生き方を確かめるために必要な行

動となるはずでず。法事や葬儀のもつ深い意味は、いま私が置かれている悲しみや悩みに向き合うことのできない本当の姿に気づかされていくためにあります。今回のテーマを通して、あなた自身はどうでしょうか、みなで話し合ってみましょう。

問い2 法事や葬儀は何のためにするのですか。しなければいけないのですか。
サブテーマ (私の問い)

2. 周りに迷惑をかけたくないので、私が死んだら「家族葬」でよいと思っているのですが。

連研中央講師・大阪教区
石崎 博紘

身近な方、中でも家族が亡くなられたときに一番最初に連絡されるのは？葬儀社ですか？寺院ですか？

最近では自宅よりも施設や病院で亡くなられる場合が多いので、提携の葬儀社に連絡されることが多いですね。

ご遺体は自宅に戻られることなく葬儀会館等に運ばれ、そこに僧侶が来て「枕経」を勤めるのが私の住む地域では一般的になっています。

しかし、浄土真宗本願寺派では「枕経」という名称のお勤めはありません。本来は「臨終勤行」をお勤めします。「臨終」は「終わりに臨む」ですから、息を引き取られてからのお勤めではなく、その方が人生の終わりに臨んで人生最後のお礼のお勤めをお仏壇のご本尊・阿弥陀如来さまにさせていただくのですが、それはとても困難なので僧侶が代わってお勤めするのが「臨終勤行」です。つまり、臨終後に故人に向けて読経するのではなく、生前中にご一緒にそのお方の人生最後のお礼のお勤めをするのです。

また、葬儀社の司会が「通夜式」という言葉を使われますが「お通夜」は「お通夜」です。「お通夜」は別に「大夜 (たいや)」とも言います。「大」という字には、例えば毎月の最終日を晦日と言いますが、12月31日は最後の晦日なので大晦日と言うように「最後の」という意味があります。また地域によっては「夜伽 (よとぎ)」とも言います。「お通夜」は、まだ故人が生きておられるものと仮定して、最後の夜 (大夜) を、夜を通して (通夜)、お伽話をするかのように (夜伽) 過ごし、故人を偲び、偲ばせていただく中にいのちの尊さと儚さに気づかされて、仏さまのみ教えを聞かせていただくのが「お通夜」です。また、葬儀式に参列できない人のためになのでしょうか。お通夜のお勤めの最中にお焼香をされることが多くなりましたが、元来お通夜でお焼香することはありませんでした。今や世間体にとらわれ形式に流されて、読経をまるで BGM かのよう焼香されるお通夜もあります。そうなれば、一番の悲しみに暮れるご遺族が、ご本尊や故人に背中を向け、お焼香してくださる参列者に向かって頭を下げお礼申されるようになってしまいます。それはおかしいと思われませんか。確かに弔問に参列してくださるかたがたへの気遣いはあると思いますが、世間体や形式を優先してしまえば、本来のお通夜の意義が失われてしまいます。

これらのことだけでも、今までの認識とずいぶんと違っているのではないのでしょうか。それは普段から僧侶と話し合う機会が少ないからかもしれません。もともと平生から事前に僧侶が説明を怠ってきた責任がありますが、「まだまだ先の話」「自分には関係ない」と避けてこられたことはなかったでしょうか。誰しにも訪れ経験する大事な事柄です。ご一緒に考えてみませんか。

さて、サブテーマにある「家族葬」ですが、私の住む地域でも「家族葬」で勤められることが多くなりました。

原因はさまざまにあると思います。住宅環境の変化や地域共同体との関係性、また「周りに迷惑をかけたくない」等々。

私は「家族葬」には一長一短があると思っています。いいなあと思うところは、前述のように世間体や形式に縛られることなく、また読経を BGM にするかのような過度なアナウンスもなく、立礼を必要としないことから、心静かに故人を偲びいのちを思うひと時を過ごせるからです。

逆に、考えさせられることもあります。それは「周りに迷惑をかけるから」ということです。

迷惑で言うならば、「家族葬」で執り行うからとご近所にもお知らせされないことがあります。その際に、後から知らされたご近所さんが「〇〇さん家のおばあちゃん亡くなられたの？ウチのおじいちゃんの（葬儀の）時にはお悔やみに来てくださって御香典をお供えしてくださったけど、家族葬ならお参りや（お返し）の御香典はさせてもらえないのかしら」とかえって悩ませて迷惑をかけることも少なくありません。

また、以前に作家の雨宮処凛さんと対談させていただいたことがあり、その時に仰った言葉が印象に残っています。それは「日本人が一番多く信仰している宗教は『人様に迷惑かけちゃいけない教』だ」というのです。言い得て妙ですね。多くの方が「人様に迷惑かけちゃダメよ」と躰けられ躰けてこられたのではないのでしょうか。しかし、人に迷惑をかけずに生きられる人っていらっしゃるのでしょうか。誰彼、人に迷惑をかけ迷惑をかけられ、それは言い換えれば支え、支えられながら人生を送ってこられたのではないですか。そんな有縁のかたがたが人生最後の葬送儀礼にお参りに来てくださることは迷惑なことなのでしょう。私は大勢の参列者がおられる葬儀の際に「皆さん方お一人お一人とのつながりが故人のいのちそのものですね」とお話したことがあります。み教えを聴聞して「おかげさま」や「生かされて生きる」と味わっておられることと、「迷惑をかけるから」と言うのは矛盾しませんか。

確かに葬儀に関しては、費用の問題等もあるでしょう。しかし、み教えに生き、み教えの中でいのち終えていく念仏者（門徒）として、後に残る人たちに伝え残していける最後の宗教儀礼について、もう一度僧侶とともに考えてみませんか。